

## 中つ巻 仲哀天皇

### 四、氣比の大神と酒樂の歌

一、禊みそぎ ここでの禊が何のためのものかは直には不明だが、忍熊王の謀反の穢れ、喪船に載った穢れを掃い淨めて氣比の大神との酒樂へと進む流れの前提の必然のこととして認められる。

二、伊奢沙和氣大神之命 氣比大神の名。名義不詳だが、イザサワケが応神の名ホムタワケと通じ合うことは見当がつく。さきのミノギが氣比大神を拝むためのものであったことも確信される。

三、夜の夢よる いめ これはたんに偶然にそういう夢を見たのではなく、氣比大神を拝むべく身を淨め角鹿の飯宮に寝ていたから、その神が夜の夢にあらわれたのだ。

四、言禱ことほぎて 易名の儀を祝つて。コトホグは言葉で祝うこと。

五、名を易かへし幣まひ 名を易えた礼物。マヒは人に贈つたり、神に献じたりする品。

六、この御酒みきは 我が御酒ならず この御酒は、我が御酒ならず、倭成やまとす、大物主の、醸みし御酒、幾久、幾久(崇神紀)ともあり、この形式は酒をほめる歌の慣用のものであったようだ。

七、酒くしの司かみ 酒をつかさどる長、クシはクスシ(奇)クスリ(藥)と同根で、酒の靈妙さをたたえた語。応神の段にある 事無酒、笑酒(一六四頁)酒をクシと訓んでいる。このカミが神かみでなく首長・司の意であることが「記伝」以来説かれている。

八、常世とこよに坐います 石立いはたす 少名御神すくなみかみ 上巻に、オホヤムヂとともに国作りしあと 少名毘古那神は、常世国に渡りましき(六〇頁四行とある。) 石立いはたすについては、「記伝」以来、神名帳に

○能登国羽作郡 大穴持像石神社

おおなもとのみかたいは

○能登国能登郡 宿奈彦像石神社

すくなびこのみかたいは

とあるのが注目されて来ているが、そこからさらに広い視野に立つて推考すると、自然石こそが国つ神の本体であり、右二神はまさにその象徴的意味合いを持つ存在である。

天汝、少名彦名の、いましけむ、志都の岩屋は、幾代経ぬらむ(万三・三五五)(大国主と少名彦名とが住んで居られたこの志都の岩屋は、神代の昔から幾代を経たことだろうか。)なども、この範疇の視野に入れて訓み解べき歌である。

岩立たす」は、岩として現ずるという意。

○齋衡三年紀(文徳実録)にも、常陸国鹿島郡大洗磯前しそやまに石神が降臨し、我は大奈母知少比古奈命なり、昔この国を造り終えて東海に去っていたが、今、民を済わんため帰来したと託言した話が見える。そしてさらに注目されるのは、この神が神名帳にいう大洗磯前薬師菩薩明神社となっている点で、これはオオナモチスクナヒコナが薬師の前身をなす神で

あったことを暗示する。今以つて温泉地には、この二神が薬師如来の地主神として祀られているところが多い。

## 応神天皇

### 一、后妃皇子女

九、品陀和氣の命 紀は誉田天皇・漢風諡号を応神天皇という応神紀に、産まれるとき 穴、腕しの上に生ひたり。其の形、輓ほむたの如し。……故、其の名を称へて誉田天皇と謂ふ」とあり、その細注に、

上古の時の俗、輓ほむたを号ひて褒武田と謂ふ」とある。斯く、輓ほむたの如き肉が腕ただむきにあったのでかく名づけたとする。記紀共通の話に即して考えるなら、ホムタはそのような手をホメた名ではなからうか。紀に誉田とあるのも、これが誉手ほむたであり、その手を誉めている可能性を暗示していると思われる。

十、輕島の明宮 島は必ずしも海中の島ではなく、秋津島・師木島などと同じく、限られた特定の地域をいう。

十一、郎子・郎女について このところの応神の系譜について留意しておきたいことは、ここに

某の郎女」という名が頻出し十三人にも及んでいる点である。

ヒコ・ヒメと呼ぶ一方イラツコ・イラツメという。両者の間にはどのような差があるか、前者が尊称とすれば後者は親称に近く、したがって、やや、人間味が漂うのは確かのような差がある。万葉集などでも大伴坂上郎女をはじめ多くの女人がイラツメと呼ばれているのにたいし、ヒメは磐姫とか松浦佐用まつらさよ嬪ひめ面とかに限られている。この応神の系譜からイラツメが急に多くなったのは、ウヂノワキイラツコの話が主題になっているのがきっかけであろう。

十二、兄の子と弟の子と云々 兄なる子と弟なると、何れをいどしいと思うか。垂仁の段  
(一一二〇頁)に「孰ニ愛夫与レ兄」とあるのと同じいかた。ウヂノワキイラツコという名がすでに若  
くていどしい子の意であり、この子を王位につけたいとする以下の話は、いうならばこの名のおのずか  
らなる締結を語ろうとするものにほかならない。

十三、愠いづれきはじきと 心むすぼれて晴れぬこと、気づかわしいこと。

○ ひさかたの雨の降る日をただひとり 山やま辺に居ればいぶせがりけり(万四・七六九)(ひさかたの  
雨の降る一日を、たった一人山の麓ふもとにいと、何ともうつとうしいことだ)

○ 隠こもりりのみ居ればいぶせみ慰なぐさむと 出いで立ち聞けば来鳴くひぐらし(万八・一四七九)(屋内に引  
き籠もつてばかりいるとうつとうしいので、気を晴らそうと外に出て立つて聞いていると、来て鳴く  
ヒグラシの声よ)  
などと万葉に多くつかわれている。

了